

会 報

TUWVOB会 No. 47 2016. 12. 21

ホームページ <http://tuwvob.yamagomori.com/> (新しくなりました)

メールアドレスの変更は利根川さんに連絡して下さい: s-tonegawa@ac.auone-net.jp

メールアドレスが不明な方へOB会報を郵送してきましたが、昨年原則としてTUWVOB会のホームページへの掲載のみとしました。郵送をご希望の方は、最後のページの事務局(8期 佐藤)までご連絡ください。

TUWVの設立年月について

3期(昭和39年卒) 後藤 龍男

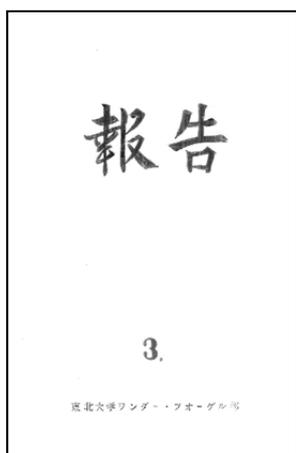
22期の利根川さんからTUWVの設立年月について問い合わせのメールを貰いました。大学のワンダーフォーゲルの歴史について調べている城島という方から尋ねられたのだそうです。言われてみると定かではありません。先年50周年記念をやった時も、それほど厳密に調べたわけではなく、かなりいい加減でした。同期の小俣君が利根川さんに送った、「「報告3」に詳しく書いてあるはずだが手元にない。後藤君が持っているはずだから確かめてみたら」と言う返信のCCが届きました。パソコンの中を探し回ったらやっと見つかりました。

「報告3」は我々3期が2年生になったばかりの昭和36年(1961年)4月に、初めて発行した部報です。それまでも「渡り鳥」という手書きのガリ版刷りのものがあったのですが、まだ部になっていなかった頃のもので、部報という扱いではありませんでした。そういう意味で「報告3」はTUWVの初の部報なのです。我々が3期という意識でタイトルを「報告3」としました。そういうわけで「報告1」、「報告2」はありません。小生が原稿集めと編集を担当し、思い切ってガリ版刷りをやめ、活版印刷にしました。あの貧乏な時代、印刷業者に払う費用をどうやって捻出したか憶えていません。「報告」という無味乾燥なタイトルにしたのも小生です。それまでの山岳同人誌は、「ともしび」とか「山小屋」などと妙にペダンティックなタイトルが多かったので、それに反発してわざとビジネスライクなタイトルにしました。無風流だと仲間内からブーイングが出たのを憶えています。「報告」の字体は、字の上手そうな教養部事務室のおじさんに頼んで毛筆で書いて貰いました。今でも部報に、この無味乾燥の、あまり上手いとは言えない字体のタイトルを使って頂いているようですが、若気の至りだったと反省しています。小生自身は肝心の「報告3」の原本を、卒業後のどさくさに紛れて紛失してしまいましたが、なぜか5期の桜君が持っていて、今では伝蔵荘の暖炉の上の書棚に置いてあります。パソコンの中から見つけたものは、それを桜君がPDF形式にデジタル化してくれたものです。利根川さんにメール添付で送ったのですが、サイズが大きすぎて届きませんでした。

「報告3」はTUWV初の活版印刷の部報と言うことで、活動報告の前に鈴木縁也先生の巻頭言と、1期の加藤哲男、2期の多田恒雄両先輩の「東北大学ワンダーフォーゲル要説」を掲載しました。鈴木先生は当時東北大学法学部に着任されたばかりの新任教授で、法学部の4年生だった加藤、倉持両先輩がお願いして、部長をお引き受け頂いたのだそうです。

前置きが長くなりましたが、TUWV発足の経緯はこの「要説」の中に詳しく書かれています。この要説は序論から始まって目的、構成、結論と10ページにわたる長大なもので、全文は原本を読まなければ分かりませんが、発足の経緯に関する記述部分を切り取って添付しますので、お読みになって下さい。発足当時の雰囲気と、昭和33年（1958年）がTUWV設立年月であることがお分かりいただけるでしょう。

なお「報告3」のPDF原本は45MBのサイズです。ご覧になりたい方がおられましたら、お申し出下さい。メール添付でお送りします。メールサーバのサイズ制限がこれより大きければお届けできます。編集担当者が55年前の大学2年生だったことを考えると、我ながら力作です。



そもそも東北大ワンゲルの芽生えが何時であったか誰が始めたのか自分は知らない。資料も残っていないし、先輩も知らせてくれなかった。しかし多分こうであろうと言える位の事はある。私が昭和33年、東北大学に入学し、ワンゲルに入った時三年生に先輩がおられた。その人達の中で名前も知っているのは阿部さんと稲村さんである。その阿部さんや稲村さんの一年前の先輩が多分始めたのではないかと思われる。〆渡り鳥〆にも活動記録がある。即ち昭和30年度である。私は一年先輩の諸兄姉にその点尋ねた事があるが彼等もわからず、結局昭和30年度に先輩の4-5人が集まって近くの山野に出かけたのが始まりではないかと想像している。それから31年度32年度の活動は記録や一年先輩の話によると、各種用具が皆無だった為、仙台の近郊を日帰りのハイクにするか、4-5日の旅行をする程度のものであった様である。その為、組織といったものはなく、唯旅行好きの連中が行きたいと思った時に集まって出かけると言った程度のもので、その人的結合も教養部の間だけで二年を終えると自然に消散していったものの様である。31、32年は富沢分校の学友会にも加入が許されず、事実上は単なる人の結合、同好会と言ったものであつたろう。そして私が入会した年、昭和33年度に初めて川内分校学友会の文化部に加入が許されたのである。その当時はまだ運動部の連中にはワンゲル運動が理解されず、止むを得ず文化部にもぐりこんだのであるがそれも苦勞の末であったことは記憶を新たにす。それ故この年、昭和33年度が東北大学に正式にワンダーフォーゲル会が発足した年であると言えよう。

ワンゲル5期 50周年同期会報告

5期（昭和41年卒）藤田 凱己

50周年同期会を9月29日30日に岳温泉鏡が池碧山亭にて開催

幹事長：藤田 凱己、幹事：桜 洋一郎（写真担当）、幹事：渋川 尚武（会計担当）

例年のワンゲル新年会で幹事と場所を岳温泉と決めた。3月25日に佐藤先輩（3期）と候補の宿（鏡が池碧山亭）を偵察、風呂が少し小さかったが担当の女性が東北大学の文学部卒業との事でこのホテルにした。

参加者は鈴木ハツヨ先生と途中退部者2名を含め22名の大盛況となった。内訳は卒業時に28名、その後鬼籍に入った人4名、不参加5名で参加者19名。ハツヨ先生は87歳と思えぬ位元気でした、仙台

名物のお土産まで全員に用意してくれており恐縮した。また少なからずの（多額の）祝儀を戴いた。

入室後部屋で皆さん集まり酒を飲みながら近況等雑談、宴会はかなり広い部屋で料理もまずまずであり満足した。部屋が思った以上に広がったので全員が幹事の部屋へ集合できた。

翌日は晴天で、希望者で安達太良山に登る予定。ケーブル乗り場へ行った所電気系統の不良で運転中止。開通する見通しが無く、仕方なくそこからスキー場をケーブルの山頂駅まで歩いた。皆さんダベリながらゆっくりと山頂駅。着いたら運転再開しており少しがっかり。今更山頂まで行けないのでケーブルで下山。

1時間半近く掛ったのでケーブルが動いていれば安達太良山頂まで行けたのに残念でした。上の方は紅葉が始まっていた。

下山後昼食と思ったが良い所がなく二本松駅へ、途中小生の誘導ミスで苦勞しながら駅へ着いた。各グループ適当に昼食を摂ることし依頼し解散。小生の車の同乗者は佐藤先輩の山荘で更に一泊し帰宅。皆様ご苦勞様でした。

5年後同期会をやるうとの話もあるが5期も70歳をとうに過ぎであり5年後は皆が元気であるか不明、3年後でも良いのではないかと思う次第である。

参加者：

鈴木ハツヨ先生、相沢宏保、朝倉肇、
海老央一、遠藤堅衛、太田光二、大塚浩
司、大槻観三、門屋大二、櫻洋一郎、佐
藤豊治、渋川尚武、瀬尾勝之、谷正美、
築地操、
庄司晃子（旧姓 塚田）、原田克介、
藤田凱己、真山晃一、八木真介、横松薫、
若槻（旧姓 嶺）



TUWV 7期 同期会

7期（昭和43年卒）真尾 征雄

平成28年10月21日（金）、7期生同期会前夜祭は創業65年の「おでん三吉」で開催されました。鈴木ハツヨ先生もお出でいただき、胃の全摘出手術後リハビリ中の上田俊朗君も奥様博子さんと駆けつけてくれました。在仙の8期生にも声掛けしたところ、渡辺幸英君、守護君、宮下さんも参加され18名と大盛況です。87歳になるハツヨ先生はお元気そうで、県や市から頼まれている調停関係の仕事や、仙台日独協会の副会長としての様々な活動をされており、相変わらずご多忙のようです。一番驚かされたのは、よく覚えていることです。はるか昔のことでも、人の名前でもすらすらと口から出てきます。同期一同感心して話を聞いておりました。

二次会は仙台で唯一残っている歌声喫茶「バラライカ」を借り切って、学生時代に歌ったロシア民謡や山の歌、反戦歌など歌いました。卒業以来はじめて口にした歌ですが、歌いだすと思い出し、当時は懐かしく思い出されました。

22日（土）は小型バスで川内へ、54期小泉君の案内で川内キャンパスを散策後ワンゲル部室へ。部屋には3年の天野君と2年の星君が待っていました。部員は、他には4年が2人と1年が3人だけとの話しに愕然としました。新入部員が少ないことが最大の問題であること。学友会からの補助が年々少なくなっており、部員の経済的負担が大きいことなどが現役からありました。合宿のこと、装備のこと、訓練のこと等ざっくばらんに話が出来ました。OBとして何か現役支援ができないか、考えさせられました。



次に青葉山に移動。皆さん青葉山キャンパスの余りの変りように驚くばかりです。大震災後に設立された東北大学災害科学国際研究所を訪問しました。ここには津波の第一人者の今村文彦所長を筆頭に、理系・文系問わず様々な分野の先生方が所属し、防災・減災について世界への情報発信と地域連携を図っています。ここで邑本俊亮教授から45分間の講義をしていただきました。テーマは「人間の行動科学的観点からの減災社会のありようは如何に」です。災害時の人間行動の心理と、今後のために出来ることをわかり易く講義していただきました。質問も多く出て、有意義な時間を過ごせたと思います。昼食は学生食堂で各自自由に食べてもらいました。

小型バスは一路蔵王へ。紅葉はいまひとつ色が冴えません。蔵王ハイライン終点で降りて、風の強い中歩いて御釜展望台へ。卒業以来はじめて見たという人がほとんどだったようです。今日のお宿は青根温泉不忘閣。伊達の殿様も宿泊湯治したという由緒ある宿。宴会前にゆっく



り好みの湯船に浸かり、殿様になった気分。宴会は大広間ではじまりました。各自近況報告をしましたが、みな多かれ少なかれ体調に不安はあるものの、前向きに生活をしている様子でした。二次会は幹事部屋で例のごとく。来年は東京でやることを決めて散会としました。

23日（日）は震災で被災した名取市閑上にむかいました。語り部の話に耳を傾け、日和山神社を参拝しました。ここでも多くの方が犠牲になっており、昨日聞いた災害時の人間行動の話が重なり、複雑な思いがしました。市場で各自お好みの昼食をとり、買物をして少しばかりの被災地支援をしました。

仙台駅には3時前に着き、来年の再会を交わして別れました。天候にも恵まれ盛り沢山の同期会でした。

【参加者】 招待：鈴木ハツヨ先生

7期：石川、上田俊朗、上田博子、大釜、大木、大山、金子、菊谷、國岡、高橋直樹、手戸、原、藤森、真尾、村山、矢崎、矢後、山口

8期：守護、宮下、渡辺幸英

同期会その後

7期（昭和43年卒）真尾 征雄

平成28年10月23日、仙台で行ったワングル7期の同期会は無事終わり、来年の再会を期して仙台駅で散会となった。在仙の3人（國岡・手戸・真尾）が幹事となり盛り沢山の内容だったが、皆さん喜んでもらい安堵した。ところが二つの気がかりなことが残された。一つは現役との懇談会で聞いたワングルの問題点《新入部員が少ないことと経済的に厳しいこと》である。もう一つは、鈴木ハツヨ先生から頂いたご厚志5万円の使い方である。

現役の話をじっくり聞きたく、11月1日國岡君と部室を訪問した。待っていてくれたのは3年で主将の天野聖太君、2年の星君、1年の3人（北村君・高山君・小林君）。これが全部員と紹介され、啞然とした。聞いた内容は以下のとおりである。

- ① 一番の問題は部員が少ないこと。山岳部も部員が少ないが、「自然に親しむ会」には部員が多い。
- ② 学友会からの補助金が年々減少し、足りないので部費を月2,000円/人徴収している。
- ③ はじめて登山をする人が多く、個人の装備を揃えるのに約10万円かかり、初期負担が大きすぎて途中でやめたり、入部しないケースがある。
- ④ テントは、6人用、4人用、3人用、2人用、1人用が各1張りあるが古くなっており、6人用は穴が開いている。

上記のヒアリング内容を同期の仲間にメールを送り、7期生として現役にどのような支援をするのが良いか相談した。いろいろな意見が出たが結論は以下になった。

- ① 鈴木ハツヨ先生からのご厚志5万円と、7期の剰余金4万円を現役支援に当てる。



② ザックを部に寄贈し、新入部員に無償で貸与して、個人の初期負担を軽減させ新入部員増加につなげてもらう。アマゾンで検索したところ、《現役が希望するザック3点と6人用テント1張り》で9万円弱なので、これを現役に寄贈する。

③ 7期手戸さんの山の大型写真を部に寄贈し、部室に飾って山の雰囲気作りをしてもらう。

東北大学ワンダーフォーゲル部は我々が青春をかけた場所であり、存続して欲しいという願望がある。

今回のことは、現役の窮状を聞いた7期生が支援策を決めたものである。取り敢えずの急場凌ぎで今後長期的にどのようにサポートするのが良いか、現役の要望を聞き、OB会全体で考えていかなければならないと思う。

8・9期合同山行 第17回

二度目の女川 ―藤中新邸見学・濱さんを偲ぶ会・黒森山登山―

9期（昭和45年卒）伊藤 健一

【参加者】 7期）真尾さん、8期）濱さんの奥様、前田さん、水上さん、三原さん、三日月さん、中里さん、渡辺さん、守護さん、9期）藤中さん、富川さんご夫妻、石野さん、原田さん、桃谷さん、伊藤健一／千代子（計17名）

女川は2013年以来2度目になります。震災後5年半を経て、藤中さんの新邸が完成するお祝いと、2015年10月に亡くなられた濱さんを合同山行仲間で追悼すること、そして藤中さんが開拓した

黒森山登山コースを登る、という盛り沢山の内容です。藤中さんへの支援を続けてきた7期の皆さんを代表して真尾さんが、また濱さんの奥様も参加され、賑やかなそしてしめやかな山行でした。

9月4日午後、既に開通している石巻線終着の女川駅に電車あるいは車で三々五々集結し、まず、駅前商店街の一角にあ

る洋品店&カフェの”ダイシン”さんで、製造中止となった最後の女川カレー（ホタテ入り）を味わい、藤中さんの新邸の見学へ。駅前の盛り土した高台の一番目立つ所が藤中さんの家で2階が塾。女川湾を見晴らす素敵な家です。聞けばキッチン周りの調度は7期の皆さんの寄付によるそうで、玄関には真尾さん製作の滝桜の絵も飾ってあります。一緒に暮らす予定の娘さんとの二世代ローンとのことでした。

女川駅2階の温泉施設”湯ぽっぽ”に入ったり駅前商店街を散策後、夕刻、宿泊先のトレーラーハウス村”エルファロ”のテラスにて、”濱さんを偲ぶ会”。前田さんの追悼の言葉の後、思い出



藤中新邸前にて

話が始まり、濱さんの奥様が持参した遺品の地図には、ほとんどのルートが赤線が引いてある二口の地図などもあって盛り上がりました。思えば1998年に第1回の当山行が始まってから第11回まで、濱さんは毎年参加され、歩行困難な濱さんを支えることが我々の目的にもなっていました。原田さんが長尺の丸棒2本を持ってきて、濱さんを挟んで電車ごっこのようにして山道を登る工夫は出色で、代わる代わる交替してたことは忘れられません。こうした写真を集めた資料を奥様にお渡ししました(pdf資料は [コチラ](#))。

夕食時、藤中サポート基金代表の桃谷さんから藤中さんへ、最後の支援金贈呈が行われました。これまでの基金残金と本年5月に最後の支援要請を行って集まった支援金のすべてを手渡し、新邸完成を機に基金を終了するのですが、桃谷さんから、今後の生活ならびに藤中さんの活躍を通しての女川町復興の一助になってほしい旨、希望が述べられました。2011年4月に始まった藤中サポート基金には、先輩・後輩を含む33名の方から計200万円近くの支援金拠出をいただきました。皆様にお礼申し上げるとともに、その気持ちが藤中さんに十二分に伝わっていると思います。

さて、女川での藤中さんの活躍ですが、桜守りの会・桜咲く地蔵基金のほか、ネイチャーガイド協会等の活動を行っています。昨年9月くらいから女川町の山々を巡るハイキングコースを作るべく、樹木・藪を伐採してのルート作りをしており、震災後に制定された三陸復興国立公園の北から南まで700kmを結ぶ”みちのく潮風トレイル”の女川町部分になるものです。ようやく出来上がった黒森山コースを登らせてもらうのが、今回のOB山行であり、途中、女川湾・牡鹿半島を見晴らす展望台が何箇所かあり、頂上からは仙台湾まで望めるのが目玉です。



濱さんを偲ぶ会(前列中央が濱さんの奥様) 藤中



藤中サポート基金贈



藤中新邸から臨む黒森山 (2016.11.17 藤中facebook)

所用で帰られた真尾さん・渡辺さん・三日月さんを除くメンバーで、仮設住宅が並ぶ運動公園から歩き始めました。ガン闘病中の富川さんは第一展望台まで頑張り、その上の第二展望台でさらに数名沈殿、のんびり景色を楽しみま
す（私も沈殿組）。残るメンバーは401mの頂上を目指し、切り開かれたばかりのルートを登っていきます。藤中さんの性格か、いや伐採の大変さ故か、急斜面でも直登ルートが多くて意外と大変かも。皆さん、それぞれ満足して、ダイシンさんに戻り、昼食後解散しました。



黒森山展望台からの女川湾展望

女川の町は随分変わりましたが、まだまだ復興途上。山を削り盛り土をして造成地を造り、住宅・施設を建ててる真っ最中です。機会があったら訪ねてみてください。藤中さんのたまり場がダイシンさんです。来年は、幹事が原田さんに代わり、月山になるようです。またの再会が楽しみ・・・皆さん、お元気で。

本稿につき、藤中さんより皆様方へメッセージが寄せられています。

TUWVの仲間みなさん、
言葉では言い表せないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。
おかげさまで、生活再建の目途もたちました。
みなさんから頂いたお気持ちは、私に残り少ない時間ではありますが、精一杯生きて、
女川の子供達や町のために力を尽くしていくことでお返しいたします。
今後とも温かい目で見守っていただけるようお願いいたします。

2016年12月

藤中 郁生



11期の同期会

11期（昭和47年卒）横川和明

前回の「第1の仕事人生卒業記念同期会」でのリクエスト「次は2年後信州で会おう」に応え、今回の同期会は松本在住の柴田と50年振りに松本に戻った私が幹事を務め、乗鞍高原の「風のチムニー」という小さなペンションを貸し切って7月9、10日に開催しました。

船の商談でノルウェーに出張し前回参加できなかった鈴木芳文は、その船の納期が逼迫し今回も参

加叶いありませんでしたが、残る全員、秋田、池田、柴田、鈴木（元）、園部、竹内、近田、仁藤、真鍋、前回から参加の野口、横川、が参加できました。

開催場所は、遠い人でも朝8時頃に家を出て翌日20時頃までに帰宅でき、体力の衰え甚だしい我々でも何とか登れる3000m級の山が有り、ゆったり露天風呂を楽しめ、煩い団体さんに悩まされない処、という条件で選んでみました。後から知ったことですが、宿の主人福島立實氏はNHKの日本百名山乗鞍岳の案内人、岩魚釣りの達人など結構TVなどで紹介されているようです。



つい一週間前は崖崩れで乗鞍への道が2か所で不通、当日も朝まで雨、ヤキモキさせた天気だったが、我々の到着を待っていたかのように回復。

時間距離で最も遠い秋田市からBMWを飛ばして来た野口が一番に到着。ラストは松本駅でタバコを吸っている間に電車に乗り遅れ、新島々まで柴田に車で迎えに戻ってもらった池田。現役並みに忙しい人、体調不良をおして参加してくれた人、全員揃って一安心。乗鞍高原には湯質の違う3つの源泉があるが、この宿の白濁の温泉はとても気持ち良い。

翌朝の行動を確認し宴会スタート。持ち寄った各地の地酒、宿の主人が囲炉裏で焼いた岩魚が宴席を賑わす。前日から高熱を出し（本人曰く鬼の霍乱）残念ながら自分が釣ったものではないと申し訳なさそう。宴会の後は囲炉裏を囲んで恒例の近況報告。身体を病んだ話が多くなるのは年のせい、仕事人生を全力で駆け抜けて来た代償か。

いつもは日付が変わっても話が尽きない我々だが、明日の山登りをひかえ今回は早めにお開き。酔い覚ましにバルコニーに出てみると、星座も読み取れない程の満天の星。

翌朝、天気は上々、例年より雪解けの早い乗鞍の峰々を朝日が明るく照らす。

宿の女将に頑張ってもらい6時過ぎに朝食。

気分が良いのか高原散策の筈だった池田が畳平まで行くと言い出したため、股関節の手術を受けリハビリ中の園部と高原案内役の柴田も一緒に7時のバスで上がってもらうことに。

畳平に着く頃から変調をきたした池田を柴田に預け、近くを散策組と剣が峰挑戦組に分かれる。少々時間を費やしたためゆっくり周りの山々や足元の高山植物を愛でる余裕は無かったが、秋田、竹内、真鍋、野口、横川が3026mの山頂に到達。順番待ちにイライラしながら急ぎ証拠写真を撮り、慌ただしく来た道に戻り、畳平で待っていた散策組と合流。嬉しいことに園部も魔王岳まで登れたとの

こと。

11時のバスで下山、上高地に寄って行くという野口と乗鞍高原で別れ、松本駅で散会。同じ方向に帰る近田、秋田等に池田を託す。

秋田が予定の新幹線をキャンセルし上田の駅を降りるまで付き添ってくれ、知人宅に無事たどり着くことができたこと池田から連絡が入る。

奇跡とも言える好天と宿と皆の協力で山上の同期会を無事遂行することが出来ました。特に企画段階からの確かなアドバイスを頂き、当日も世話役に徹してくれた柴田には感謝です。

寄る年波を考えこれからの同期会は安全第一かな？



コマクサを見に登った、ちょっとした夏山

4期（昭和40年卒）大東磐司こと 小原 佑一

長野県茅野市の限界集落の耕作放棄地を再開拓(?)して、狭いながらも畑の真似事をやっている。根雪が消え、農作業をスタートしたのが4月末、梅や桜の蕾も緩み始めて畑の脇にタラの木があり、ちょうど芽が出てくる頃であった。まずはジャガイモを植えて、ふと見るとニホンカモシカがソノソと前の空き地を歩いていた。

この集落の氏神様は鹿狩神社で、元々諏訪の殿様の鹿狩りの猟場であったところを、370年前に新田として開発された土地である。現代でもシカが多く、せつかくの作物を荒らされて農家はとても困っているが、カモシカまで山からおりてきて集落内をうろついているとは……

八ヶ岳の裾にいると言うのに、周囲の家や森にさえぎられて、私のところからは霧が峰、蓼科山以外山らしい山は、はるか彼方に中央アルプスを小さく望むくらい。ただちょっと歩いて集落の外に出れば、八ヶ岳連峰はもとより南、中央、北アルプスと見る事が出来る。体力的にもう無理は出来ないで、天気の様子を見計らってチョコッと山を歩いてみたくなる。

2年前の8月、お盆を過ぎて、美濃戸に車を置いて赤岳鉱泉、硫黄、横岳、赤岳、行者小屋とメインルートの稜線を廻ったとき、枯れ残った惨めなコマクサの花を見た。今度は、7月、梅雨の晴れ間をねらってコマクサを見に硫黄まで登ってみた。

前回、赤岳鉱泉から急な樹林帯の斜面を登り、尾根に飛び出した赤岩ノ頭で、反対側のはるか下にオーレン小屋が小さく見えた。今回は別荘地の奥の桜平に車を置いて、夏沢鉱泉、オーレン小屋へ、ここから赤岩ノ頭へ登った。前回の赤岳鉱泉からの登りほどきつくない。樹林帯を抜け、赤岩ノ頭からハイマツや岩のごろごろした登山道を硫黄の山頂に着くと、急に人が多い。さすが南八ヶ岳稜線のメインストリートの第一峰目。硫黄岳の三角点は、縦走路にある頂上と書かれたケルンから数十メートル離れているだけだが、寄り道する人はほとんどいない。三角点の脇に崩れた避難小屋の残骸と石

積みが残っている。半世紀昔の現役時代に、蓼科から赤岳まで稜線を歩き、県界尾根を下って信州峠、秩父に入って雲取まで歩いた時、この石垣の中でオカンしたことを思い出した。

硫黄岳から稜線を少し石室の方に下ると、登山道の両脇にコマクサが小さな花をつけている。今回はちょうど良いタイミング、天気も上々、たっぷり楽しませてもらった。

登山口近くで、「高山植物を鹿から守るため、電気柵を設置しているので注意してください！」との警告板があった。2年前も電気柵は設置されていたが、当時は現地に小さく「危険！」と書かれていただけだった。伊豆での伝記柵による死亡事故以後、このような警告が行なわれるようになったと思われる。

最近、南アルプスなどでも、シカが高山地帯まで登ってきて高山植物を食べてしまうということをよく聞く。これって野生動物による“農業被害”??”環境破壊”??”自然破壊”??

丹沢ではシカに下草を食べられ、表土が露出して斜面の土砂崩壊まで起きている。最近、シカの天敵“オオカミ”を復活（導入）しようという話が出ているという。もしそうなったら、オオカミは肉食獣だから雑食のツキノワグマより危険かも・・・

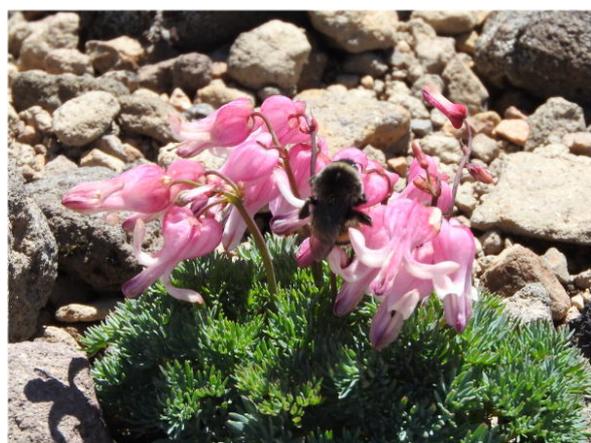
下りは夏沢峠に出て、オーレン小屋、夏沢鉱泉経由で桜平の車に戻った。久しぶりの日帰り山行でした。



庭先のカモシカ



稜線のコマクサ



コマクサの虫

50年振りの栗駒山登山

6期（昭和42年卒）加藤 邦明

前日に須川温泉の栗駒山荘に泊まっていたので、朝食を摂って、準備体操後7時50分に出発した（晴れ・やや風）。須川温泉の駐車場を横断して、敷石舗装の登山道へ、蒸の湯、浄土平への分岐、名残沼、硫黄鉱山への分岐、苔花台分岐（三途の川コースへの分岐）と経由し、左下に地獄谷の剥き出しの岩肌を見ながら、登山道左側には「地獄谷には立入禁止」の看板、昭和湖には8:50に到着した（晴れ／曇り）。昭和湖の表面は、含有する硫黄粒のためか、日の光で微妙に白色～空色と変化する。

手入れが行き届いてステップは確りしているが、早朝の降雨のため雨水の溜まった登山道を登る。天狗平に8時47分（ガス・涼風）、右側からの強風の中、尾根筋をたどる。栗駒山頂には9時10分に到着した。登山時間は2時間20分で、登山ガイドの標準時間の1時間50分とはかなり差があるが、70歳越えの歩行にしては、ま（^^）！そこそこであろう。

南方海上から北上して迫りくる台風7号の影響か、山頂はガスが掛かって展望は思わしくない。南側の中央コースからの登山者も続々と増え始め、山頂の賑やかさも増してきたので下山とした9時25分。天狗平に9時42分（ガス）、昭和湖10時18分（晴れ）、登山時とは別コースの硫黄鉱山跡に12時12分、旧噴火口12時26分（晴れ）、栗駒山荘には12時36分に戻った。

早速、栗駒山荘の硫黄色の濃いお風呂へ、2階の食堂で昼食を戴いて、次の目的地白河へ出発した。50年振りの栗駒山登山は、懐かしい青春時代を十分に思い出させてくれる旅でした。



年に一度のスキー遊びを楽しむ

8期（昭和44年卒）相原 敬

「菅平へスキーに行った人は、正面に聳えた二つの山を覚えているだろう。四阿山と根子岳。あれがなかったら菅平の値打ちはなくなる」と深田久弥氏が日本百名山に書いている。我が高崎から菅平まで上信越道を使えば二時間弱で行くことができる。そんな利便さもあって毎年のようにスキーを楽しみにしているのだが、それがまさに年に一度ぼっきりなのだ。四阿山は本格的な山スキーの範疇であり、我が家には厳しいので一度も挑戦したことがない。殆んどの人がそうするように、根子岳で山スキーの真似事することになる。根子岳は山頂近くまでツアーコースが整備されているので、気楽なお遊びとしての山スキーを楽しむことができる。

12年前に初めて板と靴を担いで山頂に登ったときには、スキー客を輸送するヘリが上空をピストンして

いた。後年ヘリ事故を契機に輸送はSNOWCATと呼ばれる雪上車に取って代わったが、未だにヘリもSNOWCATも利用したことはない。何故ならスキーをしに行くのではなく、山に登るのが主目的だから。

この山城の素晴らしさは正面に一直線に並ぶ北アの山並みや、頸城の山の眺望である。山頂直下まで登ればスノーモンスターにも会うことができる。通ううちにツアーコースではなくバリエーション的な尾根に登る喜びを覚え、霧氷に輝く雪原の中を会おう人もなく二人で気ままに登ることが多くなった。気まま過ぎて近年は山頂まで到達できないことが多い。

もともとスキーが上手ではない二人だから、4kmのダウンヒルを小分けにして、はちやめちやスキーに嬉々とする。スキーの上達や山頂ゲットという目標も意欲もなく、ただ年に一度ぽっきりのスキーが出来ればそれで満足という程度の楽しみである。

昨シーズンは雪不足に泣かされたが、今シーズンは早くも雪の便りが届いて楽しみにしている。



古稀を迎える年に百名山踏破（富士山から始まり富士山で締める）

8期（昭和44年卒）水上 俊彦

今から56年前の中学2年の夏、故郷静岡の中学の学校登山で富士山に登りました。その時は10合目の浅間大社奥宮まで登るのがやっとで、すぐ近くに見える最高峰・剣ヶ峰（37776m）には行けませんでした。去年（H28年）6月3日、前夜富士宮口5合目駐車場で車中泊したあと、快晴のもと剣ヶ峰まで登り、何とか70歳になる前に百名山登山を達成できました。今回は富士山頂への最短ルートに登り9時間で往復でき、まだまだ山登りは続けられるとの意を強くしました。又、この時期の富士山としては例年になく雪が少なく、9合5勺まで夏道が出ていて拍子抜けでしたが、折角雪山の装備を持っていったので8合目からは雪渓を登りました。

私の百名山登山を振り返るに、本格的な登山を始めたのはTUWVに入部してからですが、大学時

代に 34 山、会社在职中に 34 山、OB になってから 32 山、登ったこととなります。特にOB になってからは、未だ訪れていなかった屋久島、利尻島（ついでに礼文島も）、知床半島は、暇に任せて登山だけでなくその地の観光スポット巡りもし、日本列島の自然の豊かさを堪能できました。

又、H25 年の 7 月上旬の大雪山縦走（旭岳～トムラウシ山）では、夏の大雪山の山小屋は混むとの話もあるので、事前に 2 人用のテント（実質 1 人用）を購入してから出かけました。この年は何時になく残雪が多かったようで、1 日目の白雲岳避難小屋、2 日目の忠別避難小屋共テン場は残雪の下なので小屋泊りとなり、最後のヒサゴ沼避難小屋でやっとテント泊が実現しました。しかしこの日の夜風雨が一気に強くなり、心配であまりよく寝れなかったですが、何とかテントで耐えられました。次の日は朝からガスでしたが、百名山がかかっている私は、停滞するという相棒をテントに残し、一人でトムラウシ山往復を実行しました。途中まではガスの中、雪で夏道が隠れルートファントに時間がかかりましたが、日本庭園辺りからガスが一気に晴れて展望が開け、トムラウシ山の頂上に立てた時は感激しました。この日もヒサゴ沼泊りで、対面に望めるニペソツ山の鋭鋒には登山意欲を掻き立てられました。次の日は化雲岳経由での長い長い天人峡温泉への下りで、後半雨に降られたこともあり疲労困憊でしたが、温泉に浸った後に飲んだビールは最高でした。

小屋泊りと違ってテント泊は周りを気にしないのでのんびりできますし、昔懐かしいワンゲル時代を思い出せますので、その後もテント泊の登山を楽しんでします。北沢峠、横尾、行者小屋でのテン場からのアルプス、八ヶ岳登山、又去年 5 月連休明けでの未だ登っていなかった百名山 5 座（四国の剣山・石鎚山、頸城山塊の高妻山等）もテント泊での登山でした。最近のテン場は大半が単独行の登山者で、時代の流れを感じました。そう言えば、私も富士山で締めた去年の百名山登山 6 座は全部単独行でしたが、複数で登る時よりも、気楽にいろいろな人と話ができる機会が多く、これも楽しみの一つであることを実感しました。今年 85 歳になる会社の先輩から今シーズンもスキーと一緒に一緒に行こうと誘われていますが、このような元気なお年寄りを見習い、私も山とスキーは先々まで続けていきたいものです。



富士山頂・剣が峰（3776m）H28年6月3日



大雪山・ヒサゴ沼の朝 H25年7月5日

古希を迎えて 10日間連続クライミング

8期（昭和44年卒）佐藤 拓哉

この4月に「古希」を迎えた。遠い先のことのように思っていたが、いつの間にか「還暦」は過ぎ去り、「古来希なり」と言われた年になってしまった。それに反発するように、思い切ったことをしてみようと考え、GWに「10日間連続クライミング」に挑戦した。10日間といえば、どこかで雨が降り、身体を休める日もあるだろうと思っていたところ、天気にも恵まれて文字どおり10日間連続となってしまった。現役時代の夏合宿に次ぐ長丁場である。

前の晩に横須賀を出発し、4月29日に大台ヶ原（奈良県）に向かった。大台ヶ原と言えば、雄大な高原のイメージが強いが、深く切れ込んだ谷には大きな岩壁がいくつかあり、魅力的なルートが何本か開かれている。今回は、鈴鹿在住の夫婦の案内で、そのうちの2本を登ることにした。

長い林道を大台ヶ原を目指して登っていったところ、目の前に急に真っ白な斜面が広がった。満開の山桜かと思ったが、近づいてみると霧氷であった。GWに、しかも紀伊半島で霧氷を見るとは想像もしていなかった。



青空の広がった30日には蒸籠ぐらの「ブッシュマン（6ピッチ）」を、翌1日には千石ぐらの「サマーコレクション（8ピッチ）」を登った。この地方では、切り立った岩壁を「くら」と呼ぶらしい。写真はネットで見つけたものであり、一般登山客で賑わう大蛇ぐらの展望台から、谷を挟んだ対面の蒸籠ぐらを撮ったものである。偶然にも、「ブッシュマン」を登る我々が写っていた。下の黄色の○の中の赤い服が私である。

大台ヶ原の頂上付近は熊笹に覆われたなだらかな斜面が広がり、クライミングとは別にしても、また訪れてみたい素晴らしい山域であった。夜は満天の星空となり、天体観測をしている人が何人かいた。中でもひときわ大きく、コンピュータ制御の望遠鏡をセットしている方に木星を見せてもらった。土星のように派手ではないが、木星にもリングがあることを初めて知った。

2日には御在所岳（三重県）の藤内壁・一の壁でショートルートを数本登った。普段は多くのクライマーで賑わうこの壁も、ウィークデイなので人が少ない。翌3日は天気が崩れるという予報なので、標高の低い石水溪谷・鬼が牙（三重県）に移動した。朝から厚い雲がかかり、いつ雨が降ってもおかしくな



い天気であり、御在所を避けたのは正解であった。再び鈴鹿の夫婦と落ち合い、岩場に向かった。こじんまりとしたスラブの岩場であるが、十分楽しむことができた。新しいルートも開拓し、孫娘の愛称をとって「リンリン」と名付けてもらった。クライミングを終え、車に乗った途端に雨が降り始めた。雨の中、再び御在所に戻った。

4日は天気が好転したので、鈴鹿の夫婦と女性二人を加え、藤内壁・前尾根のマルチピッチルートを登った。人気ルートでいつも混むが、朝早く取り付いたので待ち時間もなく、気持ちよく登ることができた。その晩はみんなで藤内小屋に泊まった。夕食には山で採った山菜の天婦羅がたくさん出た。四日市の夜景が綺麗であった。

5日は鈴鹿のクライマー2名が加わり、再び藤内壁・一の壁でショートルートを登った。夕方、藤内小屋でみんなと別れ、もう1泊した。昨日は賑やかであった小屋も今日は泊り客がおらず、静かな山小屋を味わうことができた。

6日は天気が下り坂なので、近場のウサギの耳と呼ばれる岩塔を登った。小さい岩場であるが、面白いルートであった。2本登ったところで雨がポツポツきたので、クライミングを止めて下山した。車に乗った頃から雨が本格的に降り始めた。名古屋城を見学してから、小川山（長野県）に向かった。7日と8日は天気が回復し、青空が広がった。鈴鹿の夫婦の他に二人のクライマーも駆けつけ、再び一緒に小川山のマルチピッチルートを2本登った。

終わってみると、あっという間の10日間であった。山小屋に2泊した他はすべて車中泊であったが、ほとんど疲労感はなかった。どこに行っても温泉があるのも日本の山の良さであり、疲れも取れる。目標の10日間連続クライミングが達成でき、まだ当分やれるという自信がついた。今年のカイミング日数は80日を超えそうであり、スキー、ハイキングを加えると90日を超える。



秘境ラダック、ザンスカールを旅して

10期（昭和46年卒）田中 康則

今年の夏は、インド北西部のラダック、ザンスカールを旅して来ました。ヒマラヤ山脈とカラコルム山脈に囲まれた標高3500メートルの地に広がる「チベット世界」。乾いた大地に恵みをもたらすインダス川、険しい山々。そこには古くからの信仰を守りつつ、厳しい自然と共に生きる人々が暮らしています。

8月6日（土）少し早すぎるお盆休みに成田を出発。デリーで一泊。翌日空路でラダックの中心地レーへ。レーからは車でアルチへ。仏教美術の宝庫アルチ僧院などを見学。堂内部のマンダラ壁画は見るものを圧倒します。

3日目幾つもの峠を越えてイスラム教徒が多いと言われるカルギルへ。



リンチェン・サンポの植えた木（アルチで）



ペンシ・ラ峠からのドウレン・ドゥン氷河

4日目カルギルを6時に出発ザンスカールに向かいます。途中ヌン峰（7, 135m）クン峰（7, 087m）などの名峰群、間近にせまるパルカチック氷河、ドウレン・ドゥン氷河など雄大な景色やブルーポピーなどの高山植物を観察しながらの移動でした。ザンスカールの中心地パドゥムには午後9時過ぎに到着。

8月10日（水）この日から2日間はパドゥム近郊の観光です。カルーシャ僧院など多くの僧院を訪問しました。



夏に咲く高山植物ブルーポピー



民家でザンスカールの伝統舞踊を見学

8月12日（金）一路、カルギルへ。帰りも15時間の移動でした。

8月13日（土）水の都であり、インドの避暑地でもあるシュリナーガルへ行く予定でしたが、今回トラブルが生じては無理ということで、一路レーへ引き返しました。レーで観光。

8月14日（日）レーより空路デリーへ。市内観光後、夜の便で成田へ。

秘境とチベット仏教の世界。インド最北の祈りの地の旅でした。この地はその歴史の中でインドに併合されたために文化大革命の影響を受けず、今やチベット文化をどこよりも色濃く残す数少ない貴重な場所となっています。

バルカン半島を訪れて

22期（昭和58年卒）利根川 敏

バルカン半島にあるルーマニア、ブルガリア、セルビアの旅を報告します。この地域は、キリスト教とイスラム教の接点で、西欧諸国、トルコ、旧ソ連の中間地点ということもあり、過去の大きな世界大戦のきっかけになった場所です。このため、社会不安が高まらないうちにと思い、夏季休暇を使い、旅をしてきました。主な訪問先を2つ紹介します。

最初の写真はルーマニア王室の夏の離宮であるペレス城です。19世紀後半に作られたお城で首都ブカレスから電車で1時間ほどの郊外にあります。当時は王室の方々がブカレストから半日以上馬車に揺られこのお城を訪問し、ゆったりと夏の休暇を過ごしたのだと思います。大変優雅なお城でした。

次の写真はブルガリア郊外にあるリラ修道院です。首都ソフィアから110km以上離れた山奥にあるブリガリア正教の修道院で10世紀ころ作られたものです。トルコ軍がこの地域を占拠した14世紀ころはこの修道院も様々な襲撃や破壊にあったようですが、多数のフレスコ画が修復され現在に至っています。この修道院は1983年にユネスコの世界遺産に登録されています。

これら地域を1人で旅をしましたが、予想以上に平和で豊かな地域でした。ソ連崩壊から20年が過ぎたことで、教育や社会システムが大きく変化し、若い世代は自由に英語で会話ができ、スマートフォンを使いこなしています。一方で、電車やバスのキップを買う時には社会主義時代を長く経験した高齢の方々が対応するケースが多く、地元の若者が英語で通訳してくれる場面が何度もありました。街中を走るトラムやトロリーバスは旧ソ連時代の車両が多数使われており、これらに乗車するとタイムスリップした様な気持ちになります。

バルカン半島にはギリシャの北に独自の文化や歴史のある小さな国々がまだまだ多数あるため、次の機会にぜひ訪問したいと考えています。



ペレス城



リラ修道院

新年会のお知らせ

2017年1月27日(金)18:00(会費は8,000円の予定) 毎年1月の最終金曜日

新橋駅のすぐ近くにある新橋亭(しんきょうてい)新館(TEL 03-3580-2211)で行います。
お誘いの上ご出席下さい。特に若い人の出席は大歓迎です。予定が変わった時は早めにご連絡下さい。

連絡先 佐藤拓哉 Tel 046-841-8622 メール: taku0412.and.ogya113@wing.ocn.ne.jp

<2016年新年会出席者>

- (S39)小俣勝男、岡好宗、後藤龍男、松木功
(S40)小原佑一、島崎質、関川利男
(S41)相沢宏保、朝倉肇、海老央一、大田光二、
門屋大二、桜洋一郎、渋谷尚武、瀬尾勝之、谷正美、
藤田凱巳、八木真介、横山雄一郎、横松 (S42)加藤邦
明、青木祐二
(S43)大木芳正、大釜寛修、大山幸則、金子清敏、
菊谷清、高橋直樹、藤森英和、真尾征夫、上田俊朗、
山口正雄
(S44)小笠原弘三、佐藤拓哉、前田吉彦、水上俊彦、
三原健二
(S45)伊藤健一、富川正夫、原田博夫、桃谷尚安
(S46)田中康則 (S48)神山文範 (S49)岡部安水
(S50)男沢弘、今高志 (H23)水藤芳基
(H24)大石、御子柴駿 以上49名

TUWVOB会 2015年会計報告(東京口座)

1. 収入	
前回から繰越	344,643
利息	59
計	344,702
2. 支出	
次回繰越	344,702
計	344,702

新年会において、「若い人の参加を促すために会費をタダにしろ、あるいは半額にしろ」という意見が出されました。昔、会費を集めていた頃、大半は新年会に参加した方から徴収していました。このような背景を考慮の上、次回の新年会から、平成に卒業した方に対しては半額をOB会の会費から補助することにします。ご理解のほどお願いします。



★★事務局より★★

- ◇ OB会報47号をお届けします。今回も多くの方から原稿を送っていただき、ありがとうございました。山を続けている人、山から遠く離れてしまった人と様々ですが、同じワングルの飯を食った仲間であることには変わりはありません。
- ◇ メールアドレスが変更になった方は1ページ目の頭のメールアドレスまでご一報下さい。
- ◇ この会報は原則としてOB会のホームページにアップするだけとし、メールによる配信は行っていません。郵送をご希望の方はその旨お知らせください。

佐藤拓哉

239-0801 横須賀市馬堀海岸2-23-14

Tel 046-841-8622